



Chuden Foundation for Education



会いたいひとには

春を迎えるたびに思います。忘れられない恩師のことを。中学生のころにお世話になった吹奏楽の顧問の先生が大好きで、大人になってからもしょっちゅう遊びに行ったり、仕事で住み慣れた札幌をあとにするとき、率先して送別会を開いてくださったのも先生だった。

月日は流れ、日々の忙しさで故郷のことも先生のことも心の片隅にしまったまま忘れかけていた。

数年前、先生がよく見ていたテレビ局から依頼があり、その仕事によりやく慣れてきたので、近況報告も兼ねて電話をかけた。時すでに遅しとは、きつとこういうときにつかうのだろう。少し前に先生は亡くなられていた。奥さまがやさしく言葉を続ける。「いつもテレビや本を楽しみにしていたのよ」と。できることなら、先生から聞きたかった。そして、まだまだだなあと笑ってほしかった。

会いたいひとには会いに行き、伝えたい言葉は伝えなくちゃだめなんだ。子どもたちにもおしえよう。「ありがとう」「ごめんね」も全部、思ったときに話そうねと。

送別会のあの日も、桜はまだ蕾だった。蕾を眩しそうに見上げて呟く。「先生」と、ただ一言。

Yuu Takano 高野 優

NHK教育テレビにて「土よう親じかん」(2008年4月～2009年3月)、「となりの子育て」(2009年4月～2011年3月)の司会を務め、子育てママからの支持も厚い。著書は「よつめの約束」(主婦の友社)「思春期アギ」(ジャパンマシニスト社)等、約40冊。台湾、韓国でも翻訳本が出版されている。高校生中学生小学生、三姉妹の母。



特集:「思いを伝える力」 Power of telling a thought

まず、自らが動く。「思い」はそこからカタチになる。

アーティスト
水谷 孝次

Koji Mizutani

「MERRY PROJECT(メリープロジェクト)」をご存じでしょうか? 「笑顔は世界共通のコミュニケーション」をテーマに、世界中で人々の笑顔の写真とメッセージを取材し、それを傘やポスターにして各地に展示し、世界を笑顔で幸せにしているという活動です。1999年にスタートし、もうすぐ15年目を迎えるこの活動を主宰する水谷孝次さんは、アートやデザインにおいて世界の名だたる賞に多数輝いた、まさに思いを伝える達人です。一般的に日本人が苦手とする、この「思いを伝える力」は、どのような意識や経験から育まれるのか。口下手で不器用だった水谷さんが「思い」を「カタチ」にしてきた歩みに、そのヒントがあるかもしれません。



Profile

水谷 孝次 アートディレクター

1951年愛知県生まれ。日本デザインセンターを経て、1983年水谷事務所設立。東京ADC賞、JAGDA新人賞、ニューヨークADC国際展・金賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ・金賞・特別賞など数々の賞を受賞。1999年から「MERRY PROJECT(メリープロジェクト)」を開始。2005年愛知万博にて「MERRY EXPO」を展開。08年北京五輪開会式のオープニングセレモニーに芸術顧問として参加。現在、東日本大震災支援プロジェクト「MERRY SMILE ACTION」を展開中。「子どもたちの笑顔は未来への希望」というメッセージをコンセプトに、被災地に笑顔を増やすため、東北地方で希望を持って生きる子どもたちの笑顔取材している。著書に「デザインが奇跡を起こす」(PHP研究所)などがある。

自分の笑顔が、まわりの空気を変えることを知った幼少時代

3歳からの思い

「僕には、心に深く刻み込まれた幼少の記憶があるんです。おそらくあれが僕のひとつの原点でしょうね」

水谷さんがまだ3歳の時のこと。戦争による負傷で片耳を無くし、聴覚も失ってしまった水谷さんの父親は、深い闇を心に抱え、ほとんど笑わない人だった。病院への通院には、水谷さんが父の耳替りとして付き添っていた。

それはいつものように病院へ向かう市電の中だったという。「片耳がない父を見る乗客の視線は重く、僕はこの人とは関係ないよなんてふりをしてしまっていたんです。とても暑い日で、全ての窓が空いていました。するとある瞬間、僕の帽子が窓の外へ飛ばされてしまったのです」。それを見て、水谷さんは思わず声をあげて笑ってしまったのだという。「やはりまだ幼かったからかな、帽子がなくなったことより、風にさらわれて飛んで行くその光景が面白かったのかもしれない。とにかく笑ったこと、そしてその僕の笑いが車中の空気を一瞬で明るいものに変えたことをはっきりと覚えています」。父もそばで笑っていた。この時、水谷さんの中に「家族や近所の人を笑顔にするのは自分の笑顔なんだ」という思いが芽生えた。そして、「将来、僕はみんなを笑顔にする仕事がしたい」と、わずか3歳にして決意したことが水谷さんの記憶に刻み込まれたのだという。

夢中になれる居場所

もう一つ、当時、水谷少年の心を捉えて離さなかったものが

ある。海釣りだ。家は名古屋市の中心地、大須にあったが、小学校時代の夏休みは決まって海に近い三重県桑名市の母親の実家で過ごし、朝から晩まで家族が心配するのおかまいなしに釣りに熱中した。

「するとね、だんだんと魚の気持ちがわかってくる。何時ごろはどいう潮で、魚はどこそこにいるから、釣り糸はここに垂れておけばいいとか。学校の成績は良くも悪くもなく、スポーツもこれといって得意なものがない僕の、ある意味、居場所だったと思います」

中学生になって美術部に入ったのは、父親から絵を教えるもらったことがきっかけだった。

「染織家を目指していた父は絵が得意で、庭の植物などを一緒に描いたりしたことが父との唯一幸せな思い出。ただ、実は僕、誰もがびっくりするほどの不器用。どれだけ不器用かを電子工学科を専攻した大学時代の思い出を例に言うと、ラジオをつくと、僕のだけ音が鳴らない。電子回路をつくと、僕のせいでショートしてしまって、他の実験もできなくなってしまう。『結果はちゃんと教えるから、もう手を出さないでくれ』と仲間と言われる始末(笑)。そんな僕でも美術の面白さにはまることができたのは、美術部の先生のおかげです。『夏の生活』(名古屋市夏休み用テキスト)の表紙絵の応募にあたって、絵を描くのではなく紙を小さく切って貼ることを提案してくれ、僕はそれでひまわり畑をつくった。それが見事、一番に選ばれ表紙を飾ることになったのです」

戦争が残っていたものの悲しさがまだ色濃く残る家では、「自分が笑顔にならなければ」と少し無理をしていた。だから、好きなことにとことん没頭できる居場所があったことも、水谷さん

のその後を支えるもう一つの原点になったのだ。

見つけてほしい。自分を表現する術を

アートというのは、まさに作り手の思いをカタチにするものだが、その表現方法は実に幾通りもあることを知ったのも、この先生に学んだ時だった。

「自由にモビールをつくらうというテーマで、僕は魚を模した木のモビールをつくったんです。魚の気持ちがわかるくらいになっていた僕ですから(笑)、無心になって作り、結果、美術教室の庭にずっと飾られる作品ができた。それを見てみんなが感動してくれる。楽しそうな顔もしてくれる。僕が魚に抱いた思いや海や川を素晴らしいと感じたことが、こうしてカタチになることで人に伝わり、何だか幸せを与えている気がした。うれしかったですね。この美術部では、実は絵を描いた記憶がほとんどありません。どちらかというと『表現方法っていろいろあるんだ』ということを感じ学んだ3年間でした。その時は深く考えなかったけれど、もししたら先生は、誰でもその人なりに思いを伝える術はあることを教え、それに会わせなかったのかもしれない。振り返るとそんな気もしています」

思いは力になる

そんな水谷さんは、高校や大学で大切な友を得て、今度は音楽にのめり込んでいく。時代は60年安保と70年安保のちょうど境目。「音楽で世界を変えよう」と決心し、「黄金虫プロダクション」を立ち上げ、歌でメッセージを届ける活動を開始。「意外に思うでしょうが、ひっぱりだこだね。多い時は学園祭

のコンサート依頼が40くらいもあった。ただ僕らの観客はいつも3、4人だったけれど(笑)」

そしてある日、転機が訪れる。朝、新聞の社説を読むと、ロバート・ケネディ暗殺のニュースが載っていた。彼を題材にした自作の歌があったほど、平和な世界へ向かう象徴として彼に期待していた水谷さんは、言葉にならない大きな衝撃を受けた。

「その日は、ある女子短大の学園祭に出演することになっていて、ショックを抱えながらもコンサートを始めたのですが、『ロバート・ケネディの歌』あたりから場の空気が違ってきた。いつも3、4人でもザワザワしていたのに、1,000人くらいの聴衆が水を打ったようにシーンと僕の歌に聞き入っているのです」

連日のコンサートで声はガラガラ、しかもギターの弦も切れた。にもかかわらず、万雷の拍手。亡くなったケネディを思いながら、平和の大切さを思いながら、心を込めて歌った歌は、上手いとか下手とかという次元の話ではなくなっていた。

「ああこれだ、と。今まで上手く歌おう、格好良くしようとしていた。違う。そこにしっかりと気持ちがあれば、人はわかってくれる、理解してくれる。これこそが思いは力になるということだ。以来40年たった今でも、あの時の感覚が体に残っていて、僕に力をくれるのです」





インドネシア・スマトラ島のバンダアチエでのメリプロジェクト撮影風景(2009年)。少女の笑顔がまぶしい。



北京オリンピック・開会セレモニーのクライマックスで次々開かれた2008本の笑顔の傘。水谷さんが世界中で出会い、会話し、撮影した子どもたちのMERRYな笑顔である。オリンピックという平和の祭典を象徴する感動的な場面として世界中に配信された。(2008年)

どんなゴミも教科書だった。 そして僕は、いいものに出会うために街へ出た。

自分の中にいくつもの引き出しを持つ

気迫と気持ちを込めて物事にあたる。最終的にはそれがすべてを動かしていくことを知った水谷さんは、単身、東京に出てデザインの道に進むことを決める。「子どものころからずっと思い描いてきた、人に何かを伝え、人を笑顔にする仕事したい」という思いに正直になろうとしたのだ。

「歌を職業にするのは無理だが、デザインならできるのでは、とね。明らかに無謀です。美大を出たわけでもない、つてがあるわけでもない。何とか入った小さなデザイン事務所のお給料は、家賃と夜間のデザイン学校代に消え、まさに食うや食わずの日々でした」。しかし水谷さんは、さらにハードルの高い無謀な行動に出る。当時、世界の第一線でも活躍していた田中一光さんの事務所に入りたいと出向き、「来てもらっても困る」と断り続けられる中、「押しかけ同然」で入所したのである。

「最後は、田中先生も僕のしつこさにあきれて、断ることすら労力のムダと思ったのかもしれない(笑)。ともかく、アシスタントの仕事以外に掃除係と田中先生がスタッフに振る舞う昼食づくりの手伝いをしていたのですが、何をやらせても不器用な僕は、全く先生が期待するようにはできない。本の整理をすれば、気になった本をつい夢中になって読んでしまう。そういう時に限って、突然ドアが開き、先生が入ってくる。僕は不器用な上に間も悪い。そんな僕が、唯一、人に負けなれないと思えたのは、どうしてもデザイナーになりたいという強い思い。だから事務所のゴミ箱からデザインに関するものをすべて家に持ち帰り、全部広げて分析した。

どんなゴミも僕にとっては教科書だったのです」

しかし数カ月がたったころ、「明日からは来なくていい」と突然の解雇を言い渡される。その直後は目の前が真っ暗になったが、この後の田中先生の言葉が、水谷さんを世界で一流のアートディレクターにする宝物と出会わすのだ。

「課題として提出していた僕のポスターのどこがいけないかを二人きりでなんと2時間も丁寧に批評してくれた後、『君には品性と知性が足りない。いいものをたくさん見、いい人にたくさん会い、いい本を読み、いいものを食べなさい。そうしていいものというのが何か、徹底的にわかるまで、デザインはやめなさい』と言われたのです。言葉は非常に厳しいものだったけれど、目が覚めるような思いがしました。思いだけで突っ走ってきた僕を厳しく諫めるとともに、ゴミを教科書にするほどの思いの強さは認め、全く使い物にならない当時の僕に2時間も向き合ってくれたのです」

そして水谷さんは、「僕は知らないうちに閉じこもっていた。そうだ、外へ、街へ出よう。街こそ学校だ」と、その日から、いろんなところへ飛び出していったのである。自然の中にとことん身を置いたり、美術館、ギャラリーに行きまわったり、さらに超一流のデザイナーたちに臆面もなく面会を申し込み、会いに行ったりもした。表現の幅を広げるのに欠かせないいくつもの引き出しはそこから生まれた。

商業主義との決別

その後、水谷さんは、紆余曲折を経て、1983年に自分の事務所を設立。1987年ごろには「水谷に任せれば、何か面白いことをやってくれる」と仕事の依頼が殺到し、地下鉄に張ってある

世界共通のコミュニケーションツールとして 「MERRY PROJECT」を広げたい。

ポスターの8割は自分の作品という、日本を代表するアートディレクターになっていた。それに比例するように、預金残高は増えるばかり。しかし、なんだかどんどん楽しくなくなっていく。時はバブルでクライアントもお金に糸目をつけない。アメリカの大スターを起用した航空会社のポスターは、たった45分の撮影に数億円がかげられた。それは「I wanna go home soon.(こんな仕事は早く終えて家に帰りたい)」というメッセージ入りのブルゾンを着て撮影現場にやってきた大スターありきの撮影だったのだ。

「こんなのおかしい」と感じながらも、仕事の依頼を断ることができない毎日。しかし「断りきれないのは、もっと大きな仕事したい、もっと成功したいと、自分の満足を追い求めるために仕事をしているからだ」と気付いた時、水谷さんは商業主義との決別を決意する。そして、3歳の時の原点に立ち返ったのだ。一人ひとりを笑顔にするデザインをしよう。

MERRY革命

1999年に水谷さんが始めた「MERRY PROJECT」は、「あなたにとってMERRY(楽しいこと、幸せなとき、将来の夢など)とは、何ですか?」というシンプルな質問を世界中の人々に投げかけ、その笑顔とメッセージを取材して発信することで、人を、社会を、地球を幸せにしていこうというプロジェクトだ。水谷さんがデザインで社会に役立つことはできないかと悩み続け、出した答えである。これまで世界27カ国、3万人以上の笑顔とMERRYなメッセージを集め、2005年の愛知万博、2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博など国際舞台でも大々

的に展開され、この活動の輪は今、世界中に広がりをみせる。

また、神戸、スマトラ、四川と大震災のあった場所でも展開され、東日本大震災では直後から現在まで継続する中で「笑うっていいね。力が出た」という言葉をつないでいる。

「もちろん震災は起こらない方がいいに決まっている。しかし起こってしまった時、力になれるものがあるかどうかは、非常に大きな差。僕は、つらい時ほど、笑顔が救ってくれると思っているのです」

そんな水谷さんにとってのMERRYとは、「和顔愛語(わがんあいご)」だという。ブッダが2500年前に語った言葉だそうだ。何もあげる物がなければ、あなたの笑顔と優しい言葉をあげなさい。すると、あなたに笑顔と優しい言葉が返ってきますよ、と。

「ケニアのスラム街に住む少女に、あなたのMERRYは?と尋ねた時、『“あなた”よ! 今日、初めてMERRYって何かを考え、こんなにも笑った日は今までなかったわ』と笑ってくれた。強く願えば思いは届く、そしてそれは自分のMERRYとして返ってくる。僕はこれを『MERRY革命』だと言っていて、生きている限り、続けていくことが目標ですね」

プロのカメラマンではない水谷さんが撮影した、世界の子どもたちの顔からは、どれもまぶしいほどの「笑顔の輝き」が伝わってくる。彼らを撮る水谷さんの笑顔には、「笑顔は人を幸せにする」という心から湧き上がる思いが現れていて、子どもたちの心はそれに素直に共鳴するからだろう。思いを伝える力は、決して表現する技術の良し悪しで決まる力ではない。どんな表現方法でもいい。そこにしっかりと思いと行動が込められているかどうか大事なのだ。